
それでも

清音純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それでも

【Nコード】

N0932C

【作者名】

清音純

【あらすじ】

生まれつき顔立ちが良いこと以外何の取り柄もなく、それだけの理由でのけ者にされてきた私。そんな自分の運命を呪っていた私はある夜、一人の男子に出会った……。

（前書き）

この物語はフィクションです

昔からそうだった。

お金持ちでも貧乏でもない、普通の家で生まれた私。特に頭がいいわけでもなく、運動ができるわけでもなく、特技なんて聞かれても何もない、いわゆる普通の子。

それなのに、どうしても私はのけ者にされるのだろう。

初めはわからなかった。だから頑張った。皆と仲良くしようと、皆に好かれようと、色々努力した。でも、結果は同じだった。

そうして中学を卒業して高校に入学した頃、私はようやくその原因を悟った。お母さん譲りのきれいな顔立ち。思い出してみると、中学に入学した時の時やクラス替えしたばかりの頃、私に話しかけてきたのは大抵男の子だった気がする。他の女の子達は、何も無い私が男の子に人気があるのが気に食わなかったらしい。

そんな私のせいじゃないのに。私は何も悪くないのに。

でも、それが現実。だから、私は現実を受け入れる事にした。私は生まれつき不幸な運命だった。そう考えて、私は自分を納得させた。

高校を卒業して大学に入った最初の年、私はサークルの合宿とある山奥の旅館に来ていた。別にどうしても入りたかったわけではないが、クラスの人に誘われたのでなんとなく入ってみただけのサークル。どうしてもいい話を話して、何が面白いのか大声で笑い声をあげる人達。私は適当な理由をつけて夜の宴会場を抜け出し、外へ出た。

季節は夏。外の蒸し暑さを心地よい夜風が少し和らげてくれる。都会と違って、夜空にはたくさんの星が輝いていた。

なんとなく旅館の周辺を散歩してみる。辺りは静寂に包まれ、耳に聞こえてくるのは小さな鈴虫の鳴き声だけ。旅館の周辺にある森

は真っ暗で、奥に何があるのかは全くわからない。

このまま奥に進んだら、闇の中に音もなく溶け込んでしまつかもしれない。そう思いながらも、私の足は自然と森の奥へと進んだ。

森の中は思ったより足場が悪く、散歩というより探検のようになつてしまった。それでも、私は前に進み続ける。いつからか鈴虫の鳴き声も聞こえなくなり、辺りは私の足音以外、一切の音が遮断されている。唐突に、自殺の名所といわれるなんたら樹海の事を思い出した。

どのくらい歩いたのか、自分でもよくわからない。もう足がくたくたになつて歩くペースも落ちてきた頃、私はふと森を抜けて開けた場所へと出た。その先は崖になつていて、これ以上は先に進めない。今まで森の木に遮られていた月明かりが私を明るく照らし出す。その時、私は崖のところに人が立っているのに気がついた。私の足音に気がついたのか、その人がゆっくりこちらを振り返る。そして、私の顔を見ると、

「こんばんは。今日はいい月ですね」

と、挨拶をしてきた。

私と同じくらいか、少し年上に見える男の子。男の子は優しく瞳で黙つたままこちらをじつと見つめていた。

「こんなところで何をしてるんですか？」

居心地が悪くなつた私は当たり障りのない質問を投げかけると、彼は困つたように苦笑いを浮かべた。

「さあ……何してるんでしょうね？」

何故か逆に質問を返される。今度は私が困つたような苦笑いを浮かべた。

「あなたこそ、こんなところで何をしているんです？」

「散歩です。サークルの合宿で近くの旅館に泊まつてるので……」

「そうなんですか。でも、もう夜も遅い。早く旅館に帰った方がいいですよ。道はわかりますか？」

「あ、はい。多分……」

随分長いこと歩いていた気がするが、一直線に歩いてきたはずなので迷うことはないだろう。

「それは良かった。私ももう帰ります。お互い早く帰りましょう」

「そうですね」

それから別れの挨拶を交わして、私は旅館へと引き返して行った。

翌日の夜、私はまた昨日と同じ場所へ向かっていた。旅館の部屋では相変わらずバカ騒ぎが続いていたが、私は最初だけ顔を出してすぐに抜け出した。彼らとバカ騒ぎするより、静かな森の中にいる方がよっぽどいい。

昨日と同じ道筋を辿って、同じ場所へと辿り着く。すると、また同じ場所に昨日の男の子が立っていた。

「こんにちは」

今度は私の方から挨拶する。彼はその声に振り返ると、少し間を置いてから、

「こんにちは。今日はいい月ですね」

と、昨日と同じ挨拶を返してきた。

「いつもこの時間にはここにいるんですか？」

私がそう尋ねると、彼はまた困ったような苦笑いを浮かべた。

「まあ、そうですね」

「この辺りに住んでいるんですか？」

「ええ、まあ……。あなたは？」

「私は昨日と同じく散歩です」

「そうですね。でも、夜ももう遅い。早く帰ったほうがいいですよ」

「昨日よりは十分早いですよ」

「え？ ああ……そうですね」

彼は慌てた様にそう言うともた苦笑いを浮かべた。

その後、たわいもない話した後、別れの挨拶を交わして私は帰路についた。

ただ一つの違和感を残したまま。

翌日の夜、私は三度同じ場所を訪れた。合宿も今日で最後。どうしても、確かめなければならぬ事がある。いつもと同じ場所に来ると、やっぱりいつもと同じ場所に彼は立っていた。

「こんばんは」

私は昨日と同じ様に彼に挨拶する。その声に、彼はゆっくりとこちらを振り返った。

「こんばんは。今日は……」

「今日も、いい月ですね」

彼の言葉を遮って、私は彼の本来の言葉を代弁する。彼は一瞬驚いたような顔をした後、いつもと同じ困ったような苦笑いを浮かべた。

「私と会うのは、今日が三度目です」

「そうでしたか……」

彼はそれだけ言うと、黙ったまま夜空に浮かぶ月を見上げた。私も黙ったまま、同じ様に月を見上げる。音も動きもない、まるで時間が止まったかのような世界が続いた。

「24時間です」

その世界を打ち破って、彼はぽつりと呟いた。

「24時間……？」

「僕が記憶を保持してられる時間です。今日のことは、明日になれば全て忘れていきます」

その言葉に、私は何も言い返す事が出来なかった。若年性痴呆症程度かと思っていたのだが、まさかそこまでひどいとは思っていなかったのだ。

「自分がどこで生まれたのか、何故ここへ来ることになったのか、自分の年、名前、何も覚えていません。ここで暮らしていくのに必要な最低限の事だけが書かれたノートと貯金通帳だけが家に残されていて、他には何もありませんでした」

「……………」

「でも、あなたと三度も会っていると驚きでした。僕は毎日このくらいの時間帯にここに来ているみたいですね。不思議なものです、記憶は残っていないのに……………」

「……少し、質問していいですか？」

私は意を決して彼に言葉をかけた。

「僕に答えられることなら」

「そういう病気で、つらいとは思わないんですか？」

「もちろんつらいです。知り合いの一人も作れませんから」

「じゃあ……………」

私は彼に最も聞きたかった事を尋ねた。

「死のうと思っただことはありますか？」

その質問に、彼は神妙な面持ちのまましばし考えこんでいたようだったが、やがて静かに答えた。

「昨日の事は覚えていませんが、今の気持ちで言えば答えはいいえ、ですね」

「どうして！？ 昨日の事は何も覚えてなくて、知り合いはおろか自分の事すらわからなくて、そんなに不幸なのにどうして！？」

私は思わず声を荒げた。彼の答えは、私の予想と違っていたからだ。もしかしたら、この想いを共感できるかもしれない。そんな淡い期待が、私にはあった。

「……僕は、何一つ権利を持ってない人間です。何かを買って所有権を得たとしても、次の日には何故それを買ったのか忘れてしまう。何かに挑戦しようとして練習しても、次の日には何に挑戦しようとしたのかすら覚えていない。全て記録すればいいのかもしれないけど、それでは毎日昨日の記録を読むだけで終わってしまう。人生とは積み重ねだという事を、つくづく思い知らされます。積み重ねのない僕の人生は、人生とすら呼べないかもしれませんね。でも、そんな僕にもたった一つだけ与えられた権利があります。それが「死」です」

そう言うつと、彼は真正面から私の瞳を見据えた。

「生きている人は、全て平等に「死」を与えられます。それは人だけでなく、この世界に生きる全ての生物に平等に与えられた権利です。こんな僕にでも与えられた、たった一つの権利……」

そして、彼はいつもと同じ様に困ったような苦笑いを浮かべた。

「あつさり使っちゃったら、もつたいたいじゃないですか」

私はただ、彼の苦笑いを見つめるしかなかった。全ての生物にもたらされる「死」。その悲劇さえも、彼にとっては愛しむべき大切なもののなのだ。

「……もう夜も遅い。帰った方がいいですよ」

「……はい」

私は半ば呆然としたまま、そう短く返事を返した。

「あ、そうだ」

すると、彼は上着のポケットから少し小さめの手帳を取り出した。

「これ、あげます」

「え？」

「僕が書いた詩集みたいなものです。どうやら毎日書いているみたいで……。でも、昨日でページが一杯になってしまったみたいなんですよ。だから、あなたにあげます」

「でも……大切なものなんじゃ……」

「いいんです。どうせ見せる人なんていないんですから。あなたに見て貰った方が僕としても嬉しい」

そう言つて、彼は私の手にその手帳を乗せた。

「帰ります。お元気で」

別れの挨拶をして、彼が私に背を向ける。私は慌てて彼を呼び止めた。

「あの、私の名前は……」

「いいです。どうせ、明日には忘れますから」

彼は私に背を向けたままそう答えると、暗闇の中に消えていく。

私は別れの挨拶を交わすことなく、黙つたまましばらく彼の背中が

消えた闇をじっと見つめていた。

翌日の夕方、私は都会へと、元の日常へと戻ってきた。

サークルの仲間と別れ、家に帰る途中の電車の中で、私は昨日彼にもらった手帳をそつと開いた。中には一ページごとに丁寧な字で短い詩が書き綴られていた。

時には朝の陽の光を、時には昼の木々の美しさを、時には夜の闇に生える月と星を。彼はその日に見て感じた情景を、一文字一文字丁寧に言葉に綴っていた。

最後のページを開く。そこには、たった三行でこう書いてあった。
『誰も見てくれない。』

誰も聞いてくれない。

誰も教えてくれない。』

その三行を見るのがつらくて、私は手帳を閉じた。

こんなにつらいのに、こんなに苦しいのに、どうして？

ため息をついて、手帳をカバンにしまおうとする。その時、私は手帳の背表紙に何かが書いてある事に気がついた。

『それでも、』

たった五文字。ただそれだけの言葉でも、私には十分だった。

彼はこの点の後に、何を続けようとしたんだろう？

電車の中という事も忘れて、私は嗚咽を漏らしながら涙を流した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0932c/>

それでも

2010年10月8日15時11分発行